

# 今日における協働体のとらえ方

## —— ラトゥールのアクターネットワーク理論の研究 ——

大 橋 昭 一

### I. 序—アクターネットワーク理論の概要

ここで「協働体」(association) というのは、人間が作業(活動)をする場合、どのような形のもとに行われるかをいうもので、経営学などで協働体系(cooperative system)といわれているものに概ね相当する。

こうした協働体(協働体系)では、通常、単に人間(人的資源)だけではなく、物的資源もそれ相応な役割を果たすものであるから、形のうえでは、物的資源も必要な存在として前提されることが多い。しかし圧倒的多数の場合には、物的資源は人間の主体的意図や作用によって作業の要素となるものであり、その作用の仕方や方向も人間によって決められるものであるから、実際には物的資源は純粹に受動的ないし客体的な要素とされ、人的資源とは異なる次元のものと理解されている。

このため、これまでの協働体の考え方では、物的資源は単に静的なもの、環境として存在するだけのもの、あるいは人間の意向により動くものとしてとらえられ、多くの協働体系の理論などでは、実際上は重点が人間行為におかれ、例えば人間相互間の関係に焦点をおく組織論として展開されるものとなってきた。

そうしたところ、近年において作業の場を、あくまでもそれに関与するアクター(actor)の協働、すなわち「アクターネットワーク」としてとらえるとともに、アクターには人的アクターだけではなく物的アクターもいわば同等、同価値のアクターとして位置づけるべきであることを主張する「アクターネットワーク理論」が提起されてきている。

「ネットワーク」という言葉自体はかなり早くから使用されてきたものであるが、2002年にフランスのカールサンティ(Karlsenti, B.)が述べているところによると、それは学問的に意味が不明確なものとして、一旦は放棄されたものである。その後、情報技術の格段の進歩により特に組織のあり方を中心にネットワークという言葉が多用されるようになった。当時フランスではreséaux(網)という言葉には27通りの使われ方があったといわれる(cited in L2, p. 129)。

ここで取り上げるものは、1980年代以降、フランスの論者、ラトゥール(Latour, B.)やカロン(Callon, M.)、イギリスのロー(Law, J.)などを中心に改めてアクターネットワーク理論として提起されているものである(J, p. 3; K, 154頁)。そのなかでも本稿で取り上げるのはラトゥールの

所説であるが、それはイノベーションを生み出す活動はどのような社会的プロセスで可能であるかを追究する過程で形成されたものである。

それ故ラトゥールは、アクターネットワーク理論を、その生成の経緯からいっても、「科学の社会学 (sociology of science)」もしくは「科学研究 (science studies)」とよんでもいいし、そのようによばれることもあるとしている (L2, pp. 2, 87; C, p.198)。その出発点になった特徴的な考え方は、例えばかれの 1996 年の論考 (参考文献 L1) にすでにみられるが、そこでは何よりも次の 2 点が強く主張されている。

第 1 に、企業や組織などの場合は、単なる 1 つの場や面 (surface and territories) としてとらえられるのではなく、あくまでもアクターネットワークの場としてとらえられるべきことである。これは観光地のような場合、極めて重要な意味をもつ。通常、観光地という場合などには、1 つの地理的ないし行政区域的な範囲・地域としてとらえられ、そこに含まれる人や物が観光事業へ関与することのいかに問わず対象とされることが多い。しかし、その地域にある人や物は、観光事業地という観点からは、何よりもまずその地域における観光事業に関連するアクターネットワークの視点からとらえられることを必要とする (参考文献 D 参照)。

第 2 にその場合、アクターとして機能するものは、人間アクター (human) だけではなく、非人間的アクター (non human) もそうしたものとして位置づけられるべきことである。非人間的アクターの代表的なものは物的資源である。人的なものの象徴を社会 (society) というならば、物的なものを象徴するものは自然 (nature) である。この意味ではアクターネットワーク理論は「社会と自然との協働の核心 (the very essence) を解明しようとするもの」と規定される (L1, p. 2)。

以上の 2 点を総括してラトゥールは、かれの主張するアクターネットワーク理論について、それは「(これまでの) 社会理論にネットワークを付け加えようとするだけのものではない。そうではなく、ネットワークに立脚して社会理論を再構築 (rebuild) することを目指すものである」(L1, p. 2: カッコ内は大橋のもの。以下同様) と述べている。これは、別言すれば、これまでの社会理論に対し強い批判的見解を提示したものであるが、以下本稿でみるように、ラトゥール説ではこうした学問的方法論的レベルでの論議が大きな部分をなしている。これは、ラトゥールによると、「科学戦争 (science war)」といってもいいものであった (L2, p. 100)。

もっともこの点は、これをさらに広くとってアクターネットワーク理論一般についても妥当するものとし、そもそもアクターネットワーク理論一般の根本的特色は次の 2 点に、すなわち協働は人間的なものと非人間的なものとの同等的な結合であるという主張を提起する点と、旧来的理論に対して激しい批判を展開する点とにあるとする見解もある (A1, p. 1)。

本稿は、以上のうえにたって、ラトゥールの 2005 年の著 (参考文献 L2) に限定して、人的資源・物的資源を含めたところの、すなわち両者をいわば同等のアクターとする協働形態について、その所説の特徴的大要を明らかにすることを課題とするものであるが、あらかじめ次の点をお断わりしておきたい。

それは、ラトゥール説は実質的には社会学理論を主たる拠り所とするものであり、用いられている用語もそうした観点からのものが多く、それ故わが国でラトゥール説などを取り上げた論説でも用語（訳語）はそうした角度から示されているものが圧倒的に多い。しかし本稿は、ラトゥール説が課題とする人的および物的なアクターによるネットワーク理論を、経営学の立場において協働の理論として（いわば翻案的に）とらえ、提示しようとするものであることである。

例えば、前記において「協働体」と書いたのは、ラトゥールの書では“collective”もしくは“association”と表記されているもので、わが国の通常の実学的文献等では前者は「集合体」、後者は「連結体」等と訳出されているが、本稿では両者を基本的には区別することなく「協働体」と理解したうえで、表記もそのようにしている場合がある。

もっともローは、アクターネットワーク理論が解明せんとするものは、「人々が常識的に当然の存在とみなしている組織もしくはシステム（organizations or systems）の問題」であり、かつ、そうした場における「権力（power）と組織化のもともとの根源（origin）にかかわる問題」であると規定している（L3, pp. 379-380）。アクターネットワーク理論は経営学等でこそ論議されるべき性格のものである。

ラトゥールに戻ると、かれは前記の学問論方法論のレベルでは、これまでのいわば古い観念にたつ社会学理論を、一般的には“the sociology of the social”（以下本稿では『社会的なものの社会学』と表記）とよび、ラトゥールらが推進するいわば新しい社会学理論を“the sociology of the association”（以下本稿では『協働の社会学』と表記。ただしラトゥールはこれを端的には“associology”とよぶことも可としているが（L2, p. 9）、ただしこの言葉は同書索引にはない）もしくは“actor-network-theory: ANT”（以下本稿では『アクターネットワーク理論』と表記）と命名している。そして最後の「結論」の所では、「協働体（the collective）は自然と社会の拡大を行うものである」と定義し、その時には『協働の社会学』が『社会的なものの社会学』にとって代わるものになる」（L2, p. 260）と述べ、結論的な規定としている。

その際ラトゥールは、この新しい学問の名称について、これは例えば“sociology of translation”, “actant-rhizome ontology”, “sociology of innovation”等とよばれてきたものでもあり、それらを前提としたものであることを指摘したうえで、この学問の確固たる歴史的名称は“actor-network-theory”であると述べている（L2, p. 9）。これからみると、ラトゥールが2005年の著（L2）で展開しているものは、カロンらの「トランスレーション（translation: 協働実践化への導入・適応）の理論」（参照文献C: この点について詳しくは後述）なども踏まえたオーソドックスな、ただし今日の段階からいえば古典的なものといわれることがあるところの（D, p. 16）アクターネットワーク理論の概論書であると位置づけられうる。では、この書でラトゥールの問題意識となっているものは、どのようなものか。それからレビューする。

なお、参照文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

## Ⅱ．協働理論の主たる内容

### (1) 問題の提起

ラトゥール説で問題意識となっているのは、次の点である (L2, p. 247ff.)。すなわちかれによると、今日では共通の世界 (the common world) を探究することが極めて困難なことになっている。というのは、新しい協働体や協働関係が生まれ、社会的諸力の一員になるものが現れているが、しかし、それらについて内容をチェックしたり、エネルギーや動きを明らかにすることは容易ではない事態にあるからである。このことは、それに続くところの、人間以外の要素から作られる協働関係に対しても、適合不能をもたらすことがある。つまり一種の社会的麻痺 (society paralyze) が起きるかもしれない。このことは社会諸科学 (social sciences) を困惑させるものであるが、それを回避するためにも、そもそも協働体とはどのようなものであるかが改めて問われるべきなのである。

振り返ってみると、モダンの時代には協働体について、その社会的ゆえんや意義を解明することが行われてきた。しかしモダン以後の今日では、これまでのそうした社会的説明が依然として妥当するものであるかどうか問われる事態になっている。さらには、これまでのものを超えるような協働体が必要とされているのではないかという問題もある。ラトゥール自身の弁によれば「科学、宗教、政治、法律、経済、組織などあらゆる分野で、将来において作られる協働体はどのようなものかを考えねばならない現象がおきている」 (L2, p. 248)。

こうした事態が生まれているのは、ラトゥールによると、さしあたり学問的にみると、これまでの社会理論 (「社会的なものの社会学」に代表されるものであるが、社会諸科学を含む。以下同様) が妥当性をなくしたものとなっているからである。かれは、その 2005 年の著 (L2) の冒頭において、まずこの点を指摘している。本稿でも、まず、この点のレビューを行う。

### (2) 社会のとらえ方をめぐって

ここでラトゥールが問題とするのは、第 1 に、社会諸科学ではこれまで、いわゆる社会的現象について「社会的」という観点からこれを取り上げ、社会的な動き (movement) を解明すること、すなわち、なんらかの「社会的説明 (social explanation)」を行うことができるし、しなければならないと考えられてきたが、このことは果たして可能であろうか、ということである。この点についてかれは、現在の社会諸科学ではこれはなしえない課題であると結論づけ、その代わりになるものとして、社会的諸要素 (アクター) の結び付き (connection) の仕方を明らかにするところの、新しい今一つの (alternative) 現代社会科学が必要になっていると主張する。

この点についてラトゥールは、「社会的なもの」がなんらかの素材やドメインから作り上げられており、それについて「社会的な説明をすること」が、これまでは可能であったとしても、「そうしたこと、すなわちなんらかの社会的ドメインの構成要素となっているものを精密に検

討すること (inspect the precise ingredients) は、少なくとも今日ではもはや不可能になっている」(L2, p. 11) といい、そして現在の社会科学の課題は「社会的な」という言葉の意味を本来のものに戻して、その諸要素の結び付きを明らかにするところにあるよう規定し直すところにあるとする。

ラトゥールは、「これまでに『社会的ドメイン』という名のもとに集められてきた諸要素は、将来結集されるべき諸要素のうちの単に一部分をなすだけのものであり、その将来は、society とよばれるものではなく、collective とよばれるべきものである」(L2, pp. 11, 75) と主張している。この点は、換言すれば、次のような意味をもつ。すなわちこれまでは、いわゆる社会的現象はなんらかの形で社会的というものに関連づけて説明されうるし、説明されねばならないと考えられてきたが、これは、少なくとも暗黙裡に、そうした社会というものがいわば先天的にあることを前提としている。しかし、そうしたいわゆる先天的な社会というものは、今日では存在しない。少なくとも考え方の前提とすることはできない。逆である。すなわち、社会というものはアクターの結び付きにより事後的に明らかになると考えるべきものである。

ラトゥール自身の弁によれば、「これまでの社会諸科学者たちは、まず社会的な総合体 (social aggregates) といったものが所与としてあり、それによって当該社会に存在する経済、言語、人間心理、マネジメントなどは説明されうると考えてきたが、(ラトゥールらが提示する今一つの考え方によれば) 逆に、社会的な総合体は経済、言語、人間心理、マネジメントなどにより作り出される (協働) 関係によって (結果的に) 説明されうるものである」(L2, p. 5)。

このうえにたってラトゥールは、最初から「社会とは何か」そして「それはどのような発展方向にあるか」などについて問い、研究を進めることは、コント、スペンサー、デュルケム、パーソンズなどの時代には意味があったであろうが、今日では全く妥当性がない (disastrous) と述べ (L2, p. 161)、さらに (英国の首相であった) 「サッチャー女史も言っているように、『社会というようなものはない』」(L2, p. 5) と考えるべきであるとさえ宣している。

以上のうえにたってラトゥールは、第2に、これまでの社会諸科学では「社会的なもの」はすべて同質的なもの (homogeneous) と考えられてきたが、アクターネットワーク理論を中心にした新しい考え方では、「それは異質的諸要素間における協働関係の痕跡 (trail) を示すもの」として規定され、異質なものの同士の結び付きであることが強調される。この異質なもののなかには、ラトゥールの規定によると、「それ自身は社会的なものではないもの (thing)」同士の結び付きも含まれる。

このことを強調してラトゥールは、この新しい考え方では、あらゆる異質的諸要素がある条件・事情のもとでは新しい協働関係において結び付きうるという点が肝要な点であるという。イノベーション、すなわち新製品や新システムの開発などは、まさにこうしたことがあってはじめて可能になるものであり、こうしたときには、協働で結び付き合うものはどのようなものであるかについて考え方を一新しなくてはならない、と力説している (L2, pp. 5-6)。

ここでいう異質的諸要素には人的要素 (資源) とともに物的要素 (資源) も含まれる。これら



要素の主体的な担い手あるいは代弁者が、ラトゥールの2005年の著(L2)では、エージェント(agent, ただし抽象的にはエージェンシー(agency))とよばれ、協働もこのレベルで論じられる場合がある(例えばL2, pp. 44-45)。これに対し、アクターの種別(人的もしくは物的)を問わず、いわばアクター一般として問題となる次元の用語はアクタント(actant)が用いられ、それがその時々状況により異なった姿や形、すなわち具体的発現形態(figuration)をとるものとされている(L2, p. 54)。

第3に注目されるべき点は、以上のような社会観が、現実における時代的条件の変化を反映したものとされていることである。この点は、上記ですでに紹介したところの、モダンの時代には社会的なものと自然的なものとの協働体が作り上げられていたが、今日ではそれはなくなっていると述べているところに示されている。では、現在の時代はどのようなものと把握されているのか。

この点についてラトゥールでは、まず、今日はそうしたモダンとは別の時代になっており、新しい時代に照応した協働の理論、社会の理論が必要になっているという認識が基礎にあることが改めて注目される。かれによれば、モダンの時代には社会と自然とは、基本的には「1つの共通の世界」として妥当していた。しかし、現在ではそれが崩壊している。それ故かれによれば「モダニゼーションの終焉とアクターネットワーク理論の形成には関係がある」(L2, p. 262)と特徴づけられるものである。

では、モダン以後の社会、すなわちラトゥールらがいう新しい理論の前提となっている社会・時代はどのようなものか。それがポストモダン社会でないことは明らかである。というのはかれは、アクターネットワーク理論はポストモダン理論と混同されることが多いが、それは全くの誤認(very misleading)であると明記し、つづいてポストモダン論が推進する、物事や概念の「拡散(dispersion)、破壊(destruction)、脱構造化(deconstruction)は、(この新しい理論の)追求する目標ではなく、克服されるべき(be overcome)課題である」と述べているからである(L2, p. 11)。

こうしたポストモダン批判は、ポストモダン以後の社会として「トランスモダン社会(trans-modern)」が生成していることを主張するトランスモダン論において極めて強いものであるが(この点について詳しくは参考文献Ω 1, 2をみられたい)、ラトゥールの2005年の著(L2)では、表面上はトランスモダン志向性はみられない。

しかし、ラトゥールの主張には、問題意識においてトランスモダン論に通じるものがある。というのは、トランスモダン論の理論的目標は、一言でいえば、ポストモダン論を脱構造化(De-Stukturierung)ないしは脱概念化(De-Konzeptualisierung)の理論としてとらえ、これに反対して再構造化(Re-Stukturierung)・再概念化(Re-Konzeptualisierung)の主張を対峙させるところにあるが(この点について詳しくはΩ 1参照)、ラトゥールの2005年の著(L2)は“Reassembling the Social”を書名とするものであって、現在社会の根本課題は脱構造化ではなくて再構造化にあるというトランスモダン論に通じるものがあると解されるからである。

ただしラトゥール説には、通常のトランスモダン論とは質的に大いに異なるところがある。それは、一般にトランスモダン論と言われたり名乗ったりしているものでは、現在のところ、ポストモダン論に対してイデオロギー的あるいは規範論的に批判・反対の態度をとっているものが多い点である（この点について詳しくはΩ2参照）。こうした傾向は、ラトゥール説には全くない。

逆に、アクターネットワーク理論は「道徳に無関心的（amoral）」と批判されることが多い。たとえエコロジーとの関連でそうしたいわゆる道徳的側面に言及することがあっても、結局、それは副次的なもの（side-line）にとどまっていると評されている（A1, p. 5）。この意味ではラトゥール説ははじめアクターネットワーク理論は、あくまでも現実事実の客観的究明に立脚する実証理論であり、この点において通常のトランスモダン論とは決定的に区別される。

人間の道徳的側面の問題についてみると、アクターネットワーク理論のなかでもローは、そうした面があることを否定していない。しかしアクターネットワーク理論は、人間も物質も含めて分析的に（analytically）取り上げるものであるから、「人間であることの独自性は、（物的なものも含んだ）ネットワークにより生み出される結果（effect）としてのみ問題となるもの」と述べている（L3, p. 380）。これが、この問題についてのアクターネットワーク理論の一般的立場と解される。

しかし時代・社会の位置づけについては、少なくともラトゥール説は、明らかにポストモダン以後の社会・時代を念頭に置いたものである。この意味においてそれは、実証論的立場にたつものではあるが、極めて広い意味ではトランスモダン論の一翼をなすと位置づけられうるものと思料する。

ちなみに、拙別稿（Ω1）で詳述しているように、現時点におけるトランスモダン論はかなり多様で、一義的なものがあるのではない。例えばオランダの著名なツーリズム論者、アテルイエヴィック（Ateljevic, I.）は2013年の論考（A2；詳しくはΩ2参照）で、トランスモダン論とみられるもののなかには、トランスモダン論と名乗っているものでも多様であるうえに、トランスモダン論と名乗っていないが、トランスモダン論に属すと思われるものがあり、これらすべてを含めトランスモダン論という名称が統一的に使用されるのが望ましいと提言している。ラトゥール説はもとよりトランスモダン論と名乗っているものではないが、その一翼を担うものとみても相当と解される。

この関連において、第4に、ラトゥール説ではその理論があくまでも相対主義（relativism）の立場にたつものであることが強調されていることを指摘しておきたい。かれはこれまでの社会理論、すなわち「社会的なものの社会学」が相対主義以前のもの（pre-relativist）であったのに対し、新しい「協働の社会学」は全面的に相対主義の立場にたつものであると宣している（L2, p. 12）。

この場合細別すると、相対主義には2つの意味がある。1つは、アクターやアクターネットワーク、ドメインにしる、常に一定不変のものではなく、ある意味で不断に変化し、協働上の意義も変化するという意味の場合である。今1つは、このことに基づいて理論や方策も時と所によ

り妥当性が異なり、絶対的な妥当性をもつものではないという場合である。ラトゥールによると、以前のように物事の動きが緩慢で急激な変化は考えられなかったような時代には、絶対主義的な考え方も有効性をもちえたであろうが、イノベーションなどが多発し急激な変化が常態化している今日では相対主義が有効になる (L2, p. 12)。

ここで重要なことは、こうした物事のいわゆる相対主義的な多様性に基づいて、例えばアクターがなんらかの結び付き(協働)を行う場合には、考え方の違いが多発して、いわゆる論争(controversies)が盛んになることが重視されていることである。協働ではこれらの論争を収め、安定化を図ることが重要課題とされる。この点でも相対主義では、どれか1つのものを絶対的に優先するものとはせず、データに基づいて決着がなされると主張されるものとなる。

そこで次に、協働行為の過程がどのように理解されているかを考察するが、その前提となるのはネットワークそのものについての考え方である。この点はすでに、本稿冒頭で一言しているが、ラトゥールの考えるネットワークを改めて定義的にまとめておくと、それは端的には次の4つのメルクマールにより特徴づけられるものである (L2, p. 132)。

- ① ネットワークは、ポイント(点)からポイントにライン(線)で結び付いているものであり、それをなんらかの形でトレースできるもので、かつ経験的に記録されうるものである。すなわちネットワークはポイントとラインで成り立っているものであって、地域・領地をいうものではない。
- ② それ故ネットワークには1つの地域を単位に考えるような場合には、例えば魚をとる漁網のように、空白である部分があることが前提になる。
- ③ この結び付きを作り出し維持するにはそれ相当な努力が必要で、そうしたものが不要な、いわゆる無料といったものではない。
- ④ 結び付きは協働と定義されるものであるが、それぞれのポイントは結び付く協働関係が多いほど個別的意義が高まる。

### (3) 協働のとらえ方

協働は、要するに、ネットワーク関係にある人的および物的アクターの結び付きにより新しい結合体を生み出すことである。すなわち正確に言えば、「再結合(re-association)および再結集(re-assembling)により集合体が生成すること」である (L2, p. 7)。この点に関しラトゥールは3つの問題領域があるとしている (L2, pp. 16-17)。

第1に、社会的なものについて、それを事前にある特定ドメインに限定するというようなことはしないで、協働にかかわって起きる多くの考え方の違い、すなわち論争をいかにして十分に展開させるようにするかという問題がある。ここでは特定の仕方・考え方を前提にしない相対主義の立場にたつことが肝要とされる。

第2に、これらの論争のなかにおいて個々のアクターが安定した地位を占めることができる



手段をいかに充分な形で見出しうるかという問題がある。ここでは地図作成の方法 (cartography) を使い、アクターや事象の質量をできる限りフラットな形で示し、どこでどのような結び付き (協働) がなされるかを明らかにすることが肝要とされる。

第3に、社会的なものについて、(旧来考えられてきたように) それを1つの社会のなかでどのように位置づけるかということなどは問題としないで、それを1つの集合体 (協働体) のなかで再結集することを可能にするような手順はどのようなものを明らかにすることが問題になる。ここでは、これまでのモダン時代にはあったような有効性はなくなるから、それぞれのアクター、およびその (主体である) エージェントが共存できる方策を見出すことが肝要となる。

以上で明らかのように、ラトゥールの結集・協働の理論ではいくつかの特色がある。まず、第1は、上記で述べている地図的手法が可とされていることである。地図的手法は、実際にあるところの、例えば山や丘あるいは河川や海などにある高低を1つの平面で表わすものである。アクターの痕跡も同様な方法でトレース (記録) されるものとなる。アクター同士の結び付きの仕方について説明することが重要というのである

第2は、これまでの社会理論では協働方式にしても、それが一旦定まると社会的にも惰性的に継続し (social inertia), 改革は起きない。起きてても例外ということが前提とされてきたのに対し、新しい社会理論では物事や協働の実行・推進では常に論争があると考えることである。ただしそれは十分に展開されるから、例外的にトラブルはあっても、いずれなんらかの決着 (安定性) が得られて、イノベーションなども進むと考えられる。これはラトゥールによると、これまでの社会理論では協働などの社会現象の背後には「社会的力 (social forces)」というべきものがあり、それが種々な社会的領域で様々な形をとって現われると考えられたためである。しかし新しい社会理論では逆に、社会的な力というようなものがあっても、それはアクターなどの動きから事後的に明らかになると考えられるのである。これはいうまでもなく個々の社会現象以前に「社会」というものがあるかどうかという前述の問題の繰り返しである。

しかしここで肝要な点は、これによって社会現象、例えば協働の場におけるアクターの位置づけが向上することである。いうまでもなく、これまでの理論のように、アクターの背後には「社会的な力」というものがあると考えれば、アクターはそれに操られる人形ごときものになるが、反対に「社会的な力」というようなものはあっても、それはアクターの動きなどにより事後的に決まるものとする立場にたてば、社会分析の出発点をなし、かつ、結論を決めるものはアクターなどの動きということになる。

これをラトゥールは、表舞台にあるものと裏舞台にあるものとのとらえ方の逆転と称しているが、これは2005年の著 (L2) でラトゥールが一貫して、かつ徹底的に論究している中心的命題である。そこでラトゥールは、「社会的というようなものも社会というようなものも存在しない。それらのものはアクター同士の結び付きのいかんにより決まる問題である」ことを改めて力説し (L2, p.36), 社会の変化や、アクターの結び付きの際の考え方の違い、すなわち論争

の決着については「アクター自身に従え (follow the actors themselves)」(L2, pp. 68, 121) という有名な命題を提示している。

ただしその際、アクターは2種のものに分けられる。1つは協働に実質的に関与し、その成果である集合体のあり方を決めるもので、メディエーター (mediator) といわれる。他の1つは協働の場にあることは必要であるが、結果のあり方を左右することはないもので、インターメディアリ (intermediary) といわれる。定義的にいえば、メディエーターは「実践のための適応・準備 (translation) をしたり、関与する協働の意味や要素を変形させ (transformation), 歪みを起こしたり、逆に修正したりするもの」である。インターメディアリは、通常の場合での空気のように、協働の場になくてもならないが、メディエーターのように協働の内容を変化させたりすることはなく、内容的には一種のブラックボックスといってもいいものである (L2, p. 39)。

ただし、メディエーターとインターメディアリとはそれぞれの協働の場における役割・機能によって区別されるもので、ある事物や要素 (人的資源・物的資源) 自体が持つもとの特性によって、先天的にあらかじめ決まっているものではない。それ故個々の事物や要素からいえば、先天的にメディエーターであるもの、あるいはインターメディアリであるものがあるのではない。メディエーターであるかインターメディアリであるかは、あくまでも特定の協働の場における役割のいかんによりその場その場の状況によって決まるものである。

この場合、アクター同士の協働は、端的にはメディエーターの動きによって決まる。それは当該メディエーター自身の変化によってなされることもあれば、他のアクター (メディエーター) の動きに介在することによってなされることもある。こうしたメディエーターの変化、およびそのために必要な準備・適応・変化の動きが、ラトゥールでは総称してトランスレーション (協働実践化への導入・適応) といわれる。

トランスレーションについて詳しくはカロンの論考 (参考文献C) を見ていただきたいが、カロンによると、トランスレーションは①何が問題であるかを明確にすること (problematization) に始まって、②関心を持つようにすること (interessement), ③協働体 (alliance) における役割の調整・決定をすること (enrolment), ④協働体がフル活動するよう動員を図ること (mobilisation) の4者から成る (C, p. 201ff.)。なお、ローもアクターネットワーク理論は、一言でいえば、「トランスレーションの社会学 (sociology of translation)」であると定義している (L3, p. 380)。

それ故ラトゥールは、この理論からすれば、(この世には)「社会というものも、社会的領域 (realm) というものもなく、トレースできる協働を可能にするメディエーター同士の変容があるだけである」ということになる。さらにこうした観点からは、ネットワークはこうした変容活動がなされる場所であって、そこでは複数のメディエーターが協働することのある場としてとらえられる (L2, p. 108)。

この際注目されるべき点は、ラトゥールがメディエーターとインターメディアリの位置づけを、かれのいう古い社会理論と新しい社会理論の性格に関連させて次のように述べていること

である。かれは『『社会的なものの社会学』は社会的結集体（協働体）には1つのタイプしかなく、しかもそれにはメディエーターがほとんどなく、インターメディアリが多く（多種類）あると考える立場にたつものである。これに対して、アクターネットワーク理論（『協働の社会学』）では社会的結集体のタイプについて任意に選り好みができるものではないが（no preferable type）、しかしそこには無限に多くのメディエーターがあり、逆にインターメディアリは、あるとすればメディエーターから変化したものがあるだけと考えるものである」と書き、これら2つの社会理論の違いは、端的には関与する要素について、ウエートがメディエーターにあるかインターメディアリにあるかの違いにあるといってもいいものとしている（L2, p. 40）。

ここからも、アクターネットワーク理論は、要するに、協働行為において関与する人的および物的な資源が最終的なアウトプット、つまり結集体に結び付くと考えるものであることを確認できるが、実際には協働行為は必ずしもスムーズには進行しない。それは何故か。それはラトウールによれば、現実には不確実性（uncertainty）があるからである。そうした不確実性としてかれは5種のものを挙げている。次にその内容について、本稿の問題意識にかかわる点を中心に大要をレビューする。

### Ⅲ. 5つの不確実性

#### （1）グルーピングはあるが、グループとして定着しないことによる不確実性

ここでグルーピングとは、アクターが（多くの場合複数の異なった）グループ（集団）に属することになることである（以下はL2, p. 26ff.）。かれがこの不確実性のもとで論じようとしていることは、一言でいえば、グループには単なる集団にはじまって組織、階級、国家、民族など多くのものがあり、そのグルーピング活動は活発に行われるが、グループとして安定したものは多くない。このことが人々の行動を不確実なものとし、結集・協働活動に不確実性をもたらすということである。

そのうえにたってかれが結論的に言わんとすることは、社会的集合体（協働体）を作り上げるのに必要な決定的なグループは、結局、存在しないから、この点でもアクターたち自身が選んだものを可とし、グルーピング活動において残されている跡をトレースすることから始めるということが実質的に唯一の方法であるということである。

ラトウールは、もともとグループは規模も内容も一定しない空虚なもの(empty)であるとし（L2, p. 29）、グループは形成・維持・再形成の努力をしないと、消滅すると主張している。この点は、これまでの社会理論では前述のように「社会的力」が潜在的にあると考えられるため、グループの継続的存在は通例のものであり、衰退・変化・再生こそが例外的なものと考えられるが、新しい社会理論では、グループは関連するアクターたちの努力が必要なものと考えられる。これをラトウールは「実践的規定（performative definition）」とよんでいる。

こうした実践的規定からみると、「グループは静かなものではない (no silent thing)」というのは第1に、グループには、通常、グループを代表するスポークスマンが居る。スポークスマンは「絶えず自己のグループの利益となるよう動き、グループの存在を正当化し、グループに有利なルールや先例を挙げ、自分たちの主張を高揚させる」(L2, pp. 31, 34)。

第2に、グループの境界をめぐって絶えず論争がおきる。これは多くの場合、他のグループを空白なもの、時代遅れなもの、危険な作用を行うものなどの理由で行われる。それ故にこのことを考えると、グループとは常にそれに対抗するアンチ・グループ (anti-group) があるものと定義されてもよいほどである。その決着はいうまでもなく個々のアクターによってなされるものであるから、これは「物事・論争はアクター自身に任せよ」という原則の1つの適用例となる。

第3に、論争は従って、アクター自身の判断に基づいていわば再分配 (redistribution) や新グループ形成 (grouping) の形で決着が図られる。その際には、例えば旧ナチズムのように「血と土」などを持ち出すものもあり、「戦略的エッセンシャルイズム (strategic essentialism)」という理念が提起されたりする。しかしごく一般的にいえば、これはグループの洗練化・進歩をもたらす一面もあり、アクターネットワーク理論からみれば、いずれにしろ、これらの結集体は、これまでの社会理論が主張してきたようなものを超えたものとなるようにすることを必要とする。

第4に、ラトゥールによると、こうしたいわばグループ間の争い (論争) は、これまでの社会理論では社会諸科学者やジャーナリストなども巻き込んでなされる場合が多いが、アクターネットワーク理論の立場からいえば、「これはアクターに任されるべきもの」であり、こうした立場からは、平等なもの同士の間で決まった結論によって協働がなされているかが肝要な判断基準となる。

つまり、「グルーピングはあるが、グループがないことによる不確実性」は、ラトゥールによれば、確実性をとるか、混同性 (confusion) の説明をとるかの選択ではなくて、(これまでの社会理論のように) 先天的に決定がなされるもの (a priori decision) と考えるか、それともグループでは相違についての終わりなき論争という泥沼があるか考えるかの選択の問題である。そしてこの結果絶えずグルーピングが行われることを考えると、ここでもそうしたグルーピングの跡をトレースすることによってどのような社会が生まれているかを知ることが肝要なこととなる。

## (2) アクションが過大のものとなり、不透明で見通し難いことによる不確実性

ここでラトゥールが不確実性として問題とすることは、人々の行為は完全に意図的にコントロールされて行われるものではないから、その集まりである人々の大衆的行動には、相互にぶつかり合う所や (node)、こぶのように膨らんだ所 (knot)、重複状になった所 (conglomerate) など思いがけないことが起きて不透明となり、見通し難い不確実性が生じるということである (以下は L2, p. 43ff.)。

これはいうまでもなく、あるものの行為は単独の環境のなかでなされるものではなく、他のものからの影響をうける形でなされるところに原因がある。しかしこのことは、すべてのもの（端的には人間）がすべての面で同質的均質的になることを意味しない。（人間を含めて）アクター間の異質性・多様性・複雑性と一体になったそれである。

新しい社会理論の立場からいうと、こうした異質性・個別性と一体の同質性・共通性こそは、そのトレースにより（事後的に）社会・集合体を規定できるデータである。ラトゥールはこの点について、そうした共通性が何らかの（背後にある）社会的なもの（社会的力）によって決まると考えるのではなく、それにもかかわらず起きる不確実性、すなわち「行為の決定度合いの低さ（under-determination of action）」、つまり論争があり、それによって事後的に「社会とは何か」が明らかになると考ええるべきものであると述べている。

ここでラトゥールが言わんとすることは、アクターの位置について、ある1つのアクターのあり方は他の多くのものの影響をうけて作り上げられるものであるから、アクターというものは、少なくともアクターネットワークでは、1つの協働行為の源泉になると同時に、関係する多くのもののターゲットでもあるということである。従ってここでは、アクターの行為主体であるエージェンシーのあり方が問題になるとして次の4点について論じている（L2, p. 52ff.）。

第1に、エージェンシーは「何事かをするもの」（doing something）である。すなわち事柄・事態（affairs）の状態に違いや変化（transformation）をもたらすものであるが、それは、原則として、目に見えるもので、記録・計算（account）が可能なものである。というよりは、アクターネットワーク理論では、誰も言い表せないようなものや（no one mention it）、存在や作用を証明できないものはエージェンシーとして認められないというのである。これはいうまでもなく社会現象の背後には目に見えない「社会的力」があるという見解を排除せんとするものであるが、ラトゥールはここでは、「社会的なものは常に新しい形で（anew）現れるものであり、存在が単純に（simply）規定されるものではないことを論証するもの」として提示している。

第2に、エージェンシーは種々な姿・形（figuration）をとるものであるが、それと、エージェンシーそのものとは区別すべきことを主張し、そのうえにたって姿・形に囚われることは不可であると批判している。その理由には2点ある。1つは figuration という言葉には、排除すべき「社会的説明」に代えて用いられている面があることである。今1つはもともとアクターネットワーク理論では「姿・形に重点を置く社会理論（figuration sociology）」を排斥すべきものと考えていて、そのためにアクタント（actant）という用語を用いているということである。ここにはアクタントの意義が改めて示されているが、ラトゥールは姿・形に囚われないでアクターを考察することが肝要であり、姿・形の多様性も不確実性の源泉の1つというのである。

第3に、エージェンシーは他のアクターから見せかけだけのもの（fake）、時代遅れのもの（archaic）、道理に合わないもの（absurd）、合理性のないもの（irrational）、人為的なもの（artificial）、錯覚的なもの（illusory）などと批判され排斥されることがあり、これが不確実性を生み出す元



となる。これは特にグループ行動に際し起こるところの、反対グループ排除と似ており、これにより新しいものが付加されることもあるが、排除行為も起きる。

第4に、エージェンシーがメディエーターとして扱われるか、インターメディアリとして扱われるかによって、協働の結果は異なったものとなることである。それぞれのエージェンシーには、独自の行為基準 (theories of action) があり、それに基づいて活動がなされるが、論争の当事者あるいは対象とはならないことがある。ここでラトゥールは特に個人的人的アクターの行為について言及し、要旨次のように、すなわち「人間個人の行為は常に意図的なもの (intentional) であるが、この意図性がインターメディアリの意味しかないものとされるならば、このエージェンシーつまり人間がメディエーターとして扱われる場合よりも、成果ははるかに少ないものになる」(L2, p. 58) と書いている。

これからみると、ラトゥールはアクターのなかでも人的アクターと物的アクターとを区別しているものと解されるが、しかしかれは続いて、これまでの理論は要するに「意図がある人間とは別の真の (real) エージェンシーがあるという考えにはたってこなかった。さらに悪いことにはそれらのものには物的効果しかない。それ故それらのものには行動 (behavior) はあるが、エージェンシーなどはないと考えてきた」(L2, p. 61) と書いている。

しかしラトゥールによると、エージェンシーが多い (多すぎる) ことも不確実性の要因の1つである。次にこの点をレビューする。

### (3) エージェンシーの多すぎることによる不確実性

ここでラトゥールが問題とする点は、エージェンシーが多すぎることにより不確実性が強くなるだけではなく、それらのエージェンシーのなかでは序列 (hierarchies) ができ、不均斉 (asymmetries) となり、非平等性 (inequalities) が高まることである (以下は L2, p. 63ff.)。かれは「こうした不均斉は、それをなくそうとするいかなる熱情・意思・才能をもってしてもなくなる。それはピラミッドのように重いものである。……それを否定することはニュートンの重力の法則を否定するのと同様なことである」(L2, p. 63) と書いている。

ラトゥールは、これが一般に資本主義といわれるものの実態であることを否定していないし (L2, p. 63, note), これがスムーズな協働行為の妨げになっていることも否定していない。アクターネットワーク理論はこれを良しとし助長するようなものでもないとも主張している。その一方、こうした不均斉を生み出している原因については、結局、それは権力 (power) と支配 (domination) にあって、物的資本の集積 (capital, stock, reservoir) は結果に過ぎないと主張している。この点についてラトゥールは次のように論じている (L2, p. 64ff.)

すなわち、自然界についての、例えばストルム (Strum, S.; 1987 年) のヒヒの研究によれば、自然の動物などでは1つの集団におけるまとまりの源泉は「基本的社会的スキル (basic social skill)」とっていいものにあるが、人間社会ではこれに相当するものを見出すことができない。

それ故、これまでの社会理論のように「社会的対立」といったものが想定されてきた。しかしアクターネットワーク理論からみれば、それは既述のように理論的根拠がない。

そこでラトゥールはここにおいて若干の「恐ろしい力 (formidable forces)」が働いてきたものと考え、そしてその際における手段をトレースすると、動物界でみられた基本的社会的スキルに相当するものは、人間の関与する協働体制では権力と支配であるといわざるをえないというのである。ここで、実に興味深いことはラトゥールがこれまでの社会理論について次のようにコメントしていることである。

すなわちかれによれば、これまでの社会理論では「物的なものが“力関係”ならびに“社会的序列化の土台を象徴するもの”で、“社会的不平等を助長するもの”であって、“社会的権力の掌握”などを可能にする根源的な原因とされながらも、他方では、実に驚くべきことに、社会的協働活動の領域・レベルでは(人的なものに限定され)物的なものもその本源の1つであるとは理論化されてこなかったのである」(L2, p. 72)。

ただしこの場合ラトゥールは、物的アクターには社会的協働の場では断続的な形 (intermittently) でしかトレースされない特色をもつことにも一因があるという。そしてこのことが不確実性の原因の1つでもあると位置づけ、留意すべき点として次の2点を挙げている。

第1に、物的なものでは記録が容易ではないことである。というのは、物的なものの作用とはその物の利用・消費であるが、設備などでは作用の程度(例えば当該の利用によりどれ程の減価が生じているか)を正確に計量することが容易ではないからである。こうしたこともあり、これまでの社会理論では物的アクターは協働の枠外のものとされるのが通例であったが、ラトゥールはこれを正し、物的なものをそれ相当な地位におくことが肝要と強調するのである。

第2に、しかしこれをもって物的アクターが優先するとは考えないようにすることである。物的アクターが協働に参画する仕方はその時々において異なる。その意味ではその参画は断続的であり、協働は異質的なもの同士の、継続性と断続性との統合という形で進む。要は人と物について絶対的な二分法的な考え方をとらないことである。

そこでラトゥールは、協働の原則として提示した既述の「アクター自身に任せよ」という命題は、これを一部補足・変更して「アクターが社会的スキルにつけ加えてきた事物 (things) を通して織り交わる場 (weaving) において、アクターに任せよ。それは不断に変化している交互作用が永続性のあるものとなるためである」と改められるとしている (L2, p. 68)。

そのうえで、本項冒頭で述べた不均斉の問題に改めて言及し、これまでの社会理論と自分たちの新しい社会理論との違いは、特にこの点で大きなものになるという。というのは、新しい社会理論は「アクターたちにとって社会的不均斉をもたらしものについて、それをまえもってこの1つの小さな領域にだけ限定しようとはしないからである。そうではなくてわれわれは、それをアクターたちが満開となっているエンティティとして受け容れるものであるが、それは、これまで100年以上にわたって集合的存在 (collective existence) についての社会的説明からはっ

きり除外されてきたものである」(L2, p. 69) と論じている。

#### (4) 事実マターと利害マターの混同による不確実性

ここでラトウールが問題とする点は次のことである。すなわち、アクターネットワーク理論は既述のようにもともと「科学の社会学」もしくは「科学研究」として生まれたものであるから、物的資源を単なる客体的存在として、つまり単なる「事実的なもの (matters of fact: 事実マター)」として考えるのではなく、基本的には「利害があるもの (matters of concern: 利害マター)」と考えるべきであるのに対し、少なくともこれまでのところではそうなのではないため、不確実性がおこりうるということである (以下は L2, p. 87ff.)。

ただしこのことは、本稿筆者の見解では、もとより人的資源にも妥当する。人的資源を単なる所与の事実マターとして考えるのではなく、利害・関心が大なるマターとして考えるとこに現代のマネジメント (協働) の根幹はある。現代マネジメントにおける不確実性の根源は、多くがここにある。

ラトウールによると、このこと、すなわち物的資源 (本稿筆者の見解では意味的には人的資源も含む) を事実マターではなくて、利害マターとして考えることは、学問的方法論的にも大きな質的転換を意味するものである。というのは、このことはカント的な形而上学 (metaphysics) から現代的な存在論 (ontology) に移行することを意味するからである。かれはこのことを「ルビコン河を渡った」ものと表現している (L2, p. 117)。

こうした観点にたてば、すべての事物は原則として人的なものや物的なものから作り上げられる構造体と考えられるから、ラトウールは構造主義 (constructivism) に関連させて構造体の意味を検討し、それには結局、人工性 (artificiality) と客体性 (objectivity) の2側面があり、そうした角度から評価 (appreciation) されるべきものであると規定する。従って当然ながら、作られたもの (constructed) は物神性 (fetish) が必須という弱いものではないと位置づけられる。

これらのものの評価・判断の基準としては、今日でも客体性・効率性 (efficacy)・収益性 (profitability) が挙げられることが多い。しかしラトウールによれば、それらはもともとモダニズムの3大原理とされてきたものであり、かつ、その意義は明確なものではない (default)。それにもかかわらず、これまでの社会諸科学ではこれらのものが論究の前提となってきた。例えば合理性についてみると、その意味や意義が深く論究されることもなしに、それから乖離した状況、例えば非合理性というものがあることが特段に問題であると叫ばれ、そうしたものの出現する状況の探索・追究のみが行われてきた。例えば大政治家など有名人について論じる場合でも、合理性や客体性などは除外したメルクマール (stigma) などによりブランド化することが行われてきた。そして今日では、こうした基準においても客体性・ユニバーサル性・科学的外観性 (scientificity) 以外は何もないといってもいい事態にある、とラトウールは評している (L2, p. 98)。

こうした事態は、かれによれば、これまでの考え方では1つの現実について多くの解釈がな

されることが通例であったため、協働というものについて継続性や把握可能性の観点からとらえる考え方が弱くなっているために起きているものである。故に「われわれは転換をしなければならない」とし、その転換において土台となる考え方は次のようなものであると提起している (L2, p. 118ff.)。

第1に、その対象となるものは科学的事実であり、作成されたもの (fabricated) である。それらは多様な形態で存在し、作成の段階もさまざまなものであるが、協働の場へ入ってくる場合には必要な情報を発信するものである。

第2に、協働の場には種々なものがあり、日常生活に直接かかわるものも多いから、その活動過程をトレースすることは困難なことではない。このことはインターネットのウェブサイトなどをみればよくわかる。

第3に、こうしたことにより多くの情報が得られるから、科学者はその存在論的意義を探究できる機会が多くなり、理論の進展も促進される。これは「転換する存在論 (shifting ontology)」とっていいが、科学ではこれが進む。

第4に、協働をはじめとして自然にある物事 (natural things) について論争が強いものとなるから、事実マターと利害マターとの違いがますます目に見えるものとなり、現実にとって必要な手続きや方法を識別することが容易になる。要は1つの場にあるものすべてのものを利害マターとしてとらえることである。これは、現実を多様な解釈・見方のある形而上学的なものとするのではなく、統合の進展を目指すもの (progressive unification)、すなわち存在論的なものとみることである。

## (5) データ計算にはリスクがあることによる不確実性

ここでラトゥールが問題とする点は次の点である。すなわち、協働行為では既述のように記録・計算 (account) が行われるが、そこでは多くの考え方が提起され盛んに論争が起きているものであるから、遺漏のない、しかも正しい、客観的な形で「違いを記録し、多様性を吸収し、新しい場合のために必要な修正を行うこと」が果たして可能であろうか、ということである (以下は L2, p. 121ff.)。

記録・計算の土台となるものは、記録を収めたテキストであるが、それを作成した人の意図と読んだ人の理解内容が異なることはよくあるし、読んだ人がどのような実践行為をするかは多くの場合全く別の問題である。従ってここでは「同じものを異なった目 (window pane) で見ないようにすること」がさしあたり原則となるが、根本原則は「アクター自身に従え」である。

ラトゥールは、「アクターネットワーク理論からみて、良くできた記録・計算とはすべてのアクターについて行っていることを描いたものであり、それを提起しているものであって、…新しいトランスレーションの出発点や手がかりとなるものである」(L2, p. 128) と規定している。かれが言わんとするところは、すべてのアクターが、単なるインターメディアリとして存在す

るのではなく、メディエーターとして働いていること、すなわちアクターの根源に戻って、「アクターとは違いを生み出すものであり、そうしたことのないものはアクターではない」(L2, p. 130) ことを実現し、促進するような記録・計算が必要ということである。

そのうえにたって、改めて「ネットワークとは、その記録・計算において、どれほどのエネルギーや動きや独自性発揮があったかが把握されるもの」であると規定し、“月からの石”のように「ネットワークの形をとっていないようなものについても、アクターネットワークの説明」をなしうるようにすることが肝要であるとする一方、そうした記録・計算は、完全な人工性のみに依存するものではないから、つまり協働の場ではすべてのことが精密かつ正確に計上されるとは限らないから、計算にリスクがある (risky account) ものとなることを十分に認めておくべきものであるとしている。なんらかの出来事について記録をとること自体がすでに大きな変換 (transformation) であり、高度な熟練を必要とするが、記録上何かが欠落するかもしれないことは否定できないことである。

このうえにたって、ラトゥールは、要するに、展開させる (deploy) ようにすることが肝要であるという。ここで展開とは、例えばアクターを増加させたり、アクターとして役立っているエージェンシーの活動範囲を拡大させることである。これが可能になるためには、実験室の実験で行われているような工夫 (invention) が必要である。

以上のうえにたってラトゥールの書 (L2) では、続いて第Ⅱ部として「協働体はいかにして再度トレース可能なものになるか (How to Render Associations Traceable Again)」が付け加えられているが、以上の第Ⅰ部においてラトゥール説の大意は尽くされていると考えられるので、本稿では割愛し、同書の「結論——社会 (society) から協働体 (collective) へ——社会的なもの (the social) は再結集 (reassemble) されうるか——」(L2, p. 247ff.) をふまえ、本稿としてのまとめの言葉を述べておきたい。

#### IV. 結 一小括と若干のコメント

ラトゥールの書 (L2) では、その結論を含めて、これまでのいわゆる古い社会理論に対する批判的論述が多く、そうした形でラトゥールが自説を展開している部分が多い。「アクターネットワーク理論入門」を副題とする同書では当然なことであり、かつ、それには聞くべきところが多くあるものである。しかし、ここでまとめとして明らかにしておきたいことは、今日における協働体のあり方の問題であり、ラトゥール自身が述べているところによれば、それは端的には「社会的なものは何から作り上げられているのか」、「われわれが行為をしているとき、一体 (他の人間そして物的なものでは) どのようなものが行為しているのか」、「グループはどのようなグルーピング活動をしているのか」、「われわれが生きたいと思っているのはどのような社会であるか」など (L2, p. 138) として提起されるものである。



そしてそれは、ラトゥールによると、結局、社会を人的および物的アクターたちの協働の場としてとらえ、その場はこれを社会とよばず、協働体・集合体と定義することによって解明されうるものとされる。その場合、これまでの古い社会理論では、その根源（原因）となってきたものは、社会現象の背後にある「社会的力」とされてきたが、アクターネットワーク理論など新しい考え方では、そうした「社会的力」は結果的に明らかになるものと主張される。

ラトゥールは、その書 (L2) の結論において「これまでの理論では自然と社会は共存しているが、しかし別々の存在であると考えられてきた。アクターネットワーク理論が目指すものはこれを廃棄し、協働について新しい要素も入れた集合体を作り上げるという難問に対処するところにある」(L2, p. 259) と書いている。

ラトゥール説を含めたアクターネットワーク理論に対しては、すでにいくつかの批判が提起されている (A1, pp. 5-6)。例えば、アクターネットワーク理論は全く叙述的なものに終始し、社会諸過程の解明にはなっていないという批判や、それでは無限の相対主義的後退 (endless relativist regress) に化してしまうという批判である。

本稿では「研究ノート」のレベルのものであることを考え、以上のラトゥールの所論について、次の点のみをコメントしておきたい。それは、今日における協働の場における難問の最たるものは、ラトゥールも認めているように、協働の場における不均斉・非平等、つまり資本主義といわれる社会のあり方にあると思われるが、それがいかにして生まれてきたかについての認識にかかわる点である。

ラトゥールは、それを生んでいる根源は、少なくとも直接的には、権力と支配で、資本（物的資源のうち生産（協働）の基本的、不可欠な手段となるもの：つまり生産手段）の所有のいかんはその結果であるとしているが、これは原因と結果を取り違えたものではないか。すなわち、協働の場で権力と支配を生むものはこの資本の所有いかんであると考えたべきではないか。今日では資本がなければ、働くことすらできない。ラトゥールは、社会現象についてその根源（原因）が「社会的力」にあるとみるものは原因と結果を取り違えたものとしているが、権力と支配の問題では原因と結果を取り違えていると言わざるをえない。

これらは、社会的なものとの自然的なものとの統合的協働という大義のもとに、結局、社会的なもの独自の、すなわち自然的なものとの所有関係、つまり社会的関係が、所有される自然的なもの、すなわち物的なもののあり方、従って協働のあり方を最も根源的な点において決定する土台的なものであることを見落としている結果であると思料する。

ラトゥールは、30年以前にギルマンの研究室に滞在した際、社会的なものはごく小さなポリペプチドや岩石標本、飼いやられたヒビに対しとって代わることなどはできないものであるという不動の結論を得たことが忘れられないと書いているが (L2, p. 99)、その際所有関係によりそれらのもののあり方は変わることこそ注目すべきであったと考える。

なおラトゥールは、これまでの理論では不均斉・非平等などの社会的問題の根源は物的領域

にあるとされながらも、その協働理論では物的なものを捨象し、人的なものに限定しているのは、実に不可解のことであると述べているが、この批判は物的なものと人的なものとの基本的本質的差異を見誤ったところに起因がある。物的なものは人間によりコントロールされて動くものであるが故に、基本的には人間の解明により物的なものの解明もなされうると考えるべきものである。

ここで、アクターネットワーク理論の代表的論者の一人、ローの結論的見解を紹介しておきたい (L3, pp. 389-390)。ローは、アクターネットワーク理論は要するに「権力と組織のメカニクス (mechanics of power and organization) にかかわるものである」と定義し (L3, p. 380), そのうえにたつてアクターネットワーク理論の基本的メルクマールが、「エージェンシーと構造 (structure) との間において、従ってミクロ社会とマクロ社会との間において分析上の分断 (analytical divisions) を設けることに反対であるところ」、および、「人間や機械やアイデアなどの多様なものは、始原的な原因ではなくて、あくまでも、交互作用により生まれる結果と考えるべきものである点」にあるとし、ラトゥール等と同じ見解をとっている。

しかしローは、その一方、「組織 (ここでは広義に意味的には体制をも含むものと解される……大橋) ではそれを作り上げるために異種で多様なものが関与し、中心 (center) と周辺 (periphery) という不均質な関係が作り出される」ことを指摘している。というのは、「組織 (体制) というものは、作り出された結果であり、それも未完のプロセスのなかにあるものであって、その間において一連の抵抗が克服された結果であるためである。故にそれは不安定な結果 (a precarious effect) にとどまるものである。その構成要素の間にある序列制・組織的配置・力関係 (power relations) ・情報の流れ方の違い等は、異質・多様な物的手段 (materials) について秩序化 (ordering: 指揮・命令も含む……大橋) をすることのいかんにより生まれるものであるから、あくまでも不確実な結果 (uncertain consequence) と言わざるをえないものである」と述べている (L3, p. 390)。

ここで注目すべきことは、そのうえにたつてローが、「このことを分析し、その神秘性を剥ぎ取る (demystify) ものこそがアクターネットワーク理論である。アクターネットワーク理論は、権力者がもつ権力について、その神秘性を剥ぎ取るのである。この理論によれば社会は、最終的そして究極的には、権力があるものと権力がないもの (the wretched) との間において事物上の違い (difference in kind) も、そして大きな分断もないものとして実現すると考えられるが、しかしそれに至る途中の間では、権力があるものと権力がないものとの間には明確なる違いがあり、それぞれのアクターが用いる方法や手段において違いがあるものとして存在し続ける」と結論づけていることである (L3, p. 390)。

いずれにしろ、アクターネットワーク理論では、人的なものと物的なものとの協働によりはじめて物事がなし得られることでは共通している。その位置づけが論者により異なるだけである。それ故、この協働の意義を改めて提起したアクターネットワーク理論は、その意義が高く評価されるものであっても、なんら否定されるものではない。

## 参考文献

- A1: Actor-network Theory, Wikipedia: the free encyclopedia, retrieved December 20, 2013.
- A2: Ateljevic, I. (2013), Visions of Transmodernity: A New Renaissance of our Human History? *Integral Review*, vol. 9, pp.200-219; www: retrieved December 20, 2013.
- C: Callon, M. (1986), Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fishermen of St Brieuc Bay, in: Law, J. (ed.), *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?* London: Routledge, pp.196-223.
- D: van der Duim, R., Ren, C. and Jóhannesson, G. T. (eds.) (2012), *Actor-Network Theory and Tourism: Ordering, Materiality and Multiplicity*, London: Routledge.
- J: Jóhannesson, T., van der Duim, R. and Ren, C. (2012), Introduction, in: van der Duim, R., Ren, C. and Jóhannesson, G. T. (eds.) (2012), *Actor-Network Theory and Tourism: Ordering, Materiality and Multiplicity*, London: Routledge, pp.1-12.
- K: 小松秀雄 (2007) 「アクターネットワーク理論と実践コミュニティ理論の再考」『神戸女学院大学論集』54 巻 2 号, 153-164 頁
- L1: Latour, B. (1996), On Actor-network Theory, A Few Clarifications Plus More than a Few Complications; www: retrieved December 20, 2013, pp.1-16.
- L2: Latour, B. (2005), *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press; www: retrieved October 10, 2013.
- L3: Law, J. (1992), Notes on the Theory of the Actor-Network: Ordering, Strategy and Heterogeneity, *Systems Practice*, vol.5, pp.379-395.
- Ω1: 大橋昭一 (2014) 「トランスモダニティ論の勃興—現在の社会をどうとらえるか: その基本的一類型—」『和歌山大学・経済理論』376 号, 103-128 頁
- Ω2: 大橋昭一 (2014) 「ポストモダンからトランスモダンへ—現在社会のとらえ方の転換点—」『和歌山大学・観光学』11 号, 1-12 頁

## What are Cooperative Systems Today?

## Characteristics of Latour's Theory on the Actor-Network Theory

Shoichi OHASHI

## Abstract

Until now, theories of cooperative systems have only focused on human resources, but systems also consist of non-human, material resources. The actor-network theory (ANT) claiming an association between human and non-human resources has developed to include the relationship between the two. This paper surveys the features of Latour's theory from the standpoint of business management, arguing that he misunderstands cause and effect in the capitalistic cooperative system.